

近時一般歴史意識の昂揚に伴つて神話に對する世人の關心も極めて大きいものがあるが、その多くは廣義の歴史學に於ける神話なるものゝ一般的性格を論ずるか、若しくは古き神話の有する現代的意義を説くに急であつて、現に存するところの個々の神話が本來何を意味するものであつたか、またそれが如何にして今日に傳へらるゝに至つたかに就いては餘り多くの顧慮を拂つてゐないやうに思はれる。いはゞ神話の哲學のみ徒に流行して、神話そのものゝ研究はさのみ顧みられないか見える。かゝる間にあつて三品彰英君は廣い人類學的素養と鋭い文獻學的批判力とを以つてこゝ十數年來主として日本並に朝鮮の神話研究に専心せられ來つたのであつて、正しくこの方面の第一人者その業績は全く他にその比類を見ないものと言ふことが出来る。

氏の研究は前著「建國神話論考」の題名がよく示してゐるやうに主として日鮮兩國の起源を説くところの神話、即ちいはゆる始祖神話を對象とするものであるが、これは氏がもと／＼歴史家として兩國の始源に深い興味を有することによるのみでなく、今日まで傳へられた兩國の神話が、いづれも史書の形に於いて記録せられ、久しい間歴史として信ぜられ來つたものなることより自ら來るところであつた。従つて氏はまづこれら兩國の始祖神話が本來兩國民の間に存した古代の信仰とその祭儀の實修とから起つたことを前提としつゝ、かゝる原古の觀念が、はじめて史書に記録せら

れるに當つて如何やうに變形せられたかといふ點をつとめて明かにされようとする、その際日鮮兩國の間に同種同様の神話がさまざまの形に傳へられてゐることは極めて好都合であつて、それらを互に比較することによつて、これを記録した筆者の、その神話に對する解釋の仕方、即ち同じ筋の話を對して重點の置き所の相異が明かにせられ、それによつて逆はその記述の素材となつた神話のものとの形が復原されるまたそのもの意味が推察されることゝなるのである。

本書に收められた「記祀神話異傳研究の一論」はかゝる方法をわが國の神話に就いて試み、且つ最も鮮かにその目的を達せられたものであつて、書紀の本文並にその第六の一書に最も早期的、基本的所傳を認め、これに對して書紀の第一の一書並に古事記にその最も後期的發展の所傳を指摘しその一から他への發展の裏にわが國の古代に於ける國家的發展の跡を證示されてゐる。「脱解傳説」並に「首露傳説」は共に朝鮮に傳へられた神話の解明であるが、同じく種々の異傳の比較によつてその基礎となつた東海龍神の信仰や、龜茲峯に降臨する神童を迎へる行事が、永く後代までも存続した事實を明かにしてゐる。而して地理的に日鮮の間に位置する「對馬の天童傳説」は神話傳説の上に於いてもこの島が兩國の中間に立つてその相互の比較の媒介をなすものなることを語るものであつて、素材的にも新に氏によつて紹介せられるところが多く、本書中最も興味深い一篇をなしてゐる。以上の外、天之日矛歸化年代致、「かぐや姫の本質に就いて」並にこれらすべ

てを總括すべき「東洋神話學より見たる日本神話」の三篇が記載されてゐる。(A5判三〇〇頁・昭和十八年六月・大阪柳原書店發行・定價三圓九〇錢)(柴田實)

陶淵明 村上嘉實著

東洋史研究會同人手に成る支那歴史地理叢書は、支那事變が漸く擴大しつつある時、支那に關する歴史的知识を一般讀書人に正確かつ妥當に傳へることを目的としたものであるが、今や時局は當時に比し飛躍的に緊迫の情態に進みつつあり、學徒奉公の途も前述の様な啓蒙的立場に留ることを許されない。この時に當り十一冊既刊後少時とだへてゐた本叢書に新たに畏敬すべき先輩村上氏の好著を加へたことは吾等同人のみの喜びとすべきではない。本書は學道の書である。著者は陶淵明と共に東洋的「日本の精神」を追究し、現實の割目に憐みつつ全體否定的な無においてその究極の立場を見出された。東洋學關係の日々氾濫する數百の書物において、何分の一かその動機において意圖において本書と氣高さを併しうしうるものがあらうか。本書は章を分つこと六、先づ一、「陶淵明の性格」において、親友を思ひては靜かなる(停雲)國運を憂ひては熱烈なる(詠荊軻)家族を慮つてはこまやかなる(祭程氏妹父等)情の人、歸玄來辭等に見える無欲・素朴で質性自然と自らいふ眞の人としての陶淵明を描寫し、更に彼の性格は日本的な情趣に通じ魏晉逸民の一方的な現實逃避と異なることに注意される。二、「陶淵明に見る東洋的なるもの」において、三十

一歳の轉機以來、藝術の奥に自我の否定としての東洋的の自然を宗教を見出し現實の矛盾に對決しつつ偏理に憐み生死の問題に苦しんだ彼の內的發達を歸田園居、飲酒、雜詩等により窺ひ、三、「陶淵明の藝術」において純眞・平淡な彼の藝術には聖の否定としての碑に通ずる酒脱がありとし、四、「六朝精神と陶淵明」では此迄述べた彼の精神生活の矛盾とその解決の過程を、現代のみと共に東洋史上の二大轉換期たる六朝時代の思潮と結びつけ解し、五、「情緒主義について」では彼の詩に見られる享樂的傾向はその基調でもなく頽廢的なるものでもないと論じ、最後に六、「家庭及び生活」において、官途の榮達はもとより生活の安易さへ捨てて困窮の中に農耕に勵みつつ、自然に還るを求めた彼の姿を描寫してゐる。即ち著者は隱遁文學の代表なるかに俗に解せられる陶淵明が實はしからずして、國家・家族生活の現實に對して能動的態度を把持してゐたことについて、讀者の注意を喚起せんとしてゐるものと察せられる。拙き紹介の筆を擱くに當り、著者今後の研鑽を期待し、かつ本書の内容が一人でもより多くの指導的な人々に理解されんことを祈るものである。(四六版本文・一七七頁・年譜・參考文獻六頁・東京富山房發行・定價壹圓五拾錢)(宮川尚志)

國家の興亡と歴史家 酒井三郎著

歴史家は後向きの豫言者であると謂はれる。彼が如何に自分勝手に、自分だけの恣意を以て過去の事物に沈潛してみようと、